

● ドリーナ バレエ シリーズ〈6〉

はじめての^{あい}愛

ジーン=エストリル作／谷村まち子訳



Drina Ballet Series

●ドリーナ・バレエ シリーズ 6

はじめての愛

N.D.C. 933 268p 18cm

©1978 Machiko TANIMURA

発行 1978年11月 初版1刷

作者 ジーン＝エストリル

訳者 谷村まち子

発行者 今村 広

発行所 偕成社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3-5 〒162

振替・東京5-1352番

印刷所 中央精版印刷株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえます。 Printed in Japan.
8397-730060-0904

DRINA DANCES IN NEW YORK

Copyright ©1974 by Jean Estoril
Japanese edition published by KAISEI-SHA Co.1978
by arrangement with Kern Associates.

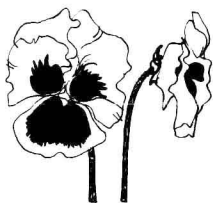
●この物語^{ものがたり}について

エンジンバラ祭^{さい}で『クルミ割り人形^{にんぎょう}』の小さなクララの役^{やく}をおどり、大成功^{だいせいこう}をおさめたドリーナは、バレリーナの道への第一歩^{だいいぽ}をふみだしました。

しかし、亡^なくなった母^{はは}が、名^{めい}バレリーナのエリザベスIIアイボリーであるというひみつを、ドミニク・バレエ学校の先生に知られてしまいます。

ロンドンにもどったドリーナは、自分だけの力でバレリーナになりたいという決意^{けつい}を新^{あら}たに、新学^{しんがく}期^きをむかえようとしていました。

そのやさき、ドリーナは、商用^{しょうよう}でアメリカへいくことになった祖父^{そふ}母^ぼと、船でニューヨークへ旅^{たび}だつことになりました。生まれてはじめて見る豪華客船^{ごうかきゃくせん}！ その船の上で、ドリーナは、アメリカの青年^{せいねん}と知りあい、心をひかれていくのですが……。



もくじ

第一部 愛のめざめ

ジェニーのくるしみ	8
ドリーナのまよい	21
ニューヨークへの船出	40
恋のとりこに	58
不幸な少女、ヨランダ	75
ドリーナの演出	91
船上のコンサート	106
朝霧のなかの自由の女神	124



筆者紹介

訳者 谷村まち子（たにむら まちこ）
1914年東京に生まれる。津田塾大学卒業。児童むけの創作や、英米児童文学の翻訳の分野で活躍。著書に「貝のうた」「星のかんむり」「ちょうの夢」(ヨルタン社)、訳書に「黒い目のレベッカ」「夢の/\\レリーナ」(偕成社)など多数
住所 中野区鷺宮3-14-14 鷺宮ハイツ

画家 山野辺進（やまのべ すすむ）
1938年満州に生まれる。新聞、週刊誌の小説や児童書のさし絵、絵本のほか、単行本、文庫本の装丁など、出版美術界で活躍。児童物の作品として「祖国へのマズルカ」「十五少年漂流記」(学研)「怒りのぶどう」(偕成社)など多数
住所 田無市南町3-15-1

装丁 クリエイション・ハウス

第一部 愛あいのめざめ



ジェニーのくるしみ

「ロンドンには、ちっともかわってないわ。」

タクシーがホワイトホール通りを走っているとき、ドリーナは窓から外をのぞいて、まゆをしかめたので、おじいさんのチェスター氏はわらって、

「ドリーナはロンドンがかわつてるとでも思ったのかね？ わたしたちは、ほんのちよつとのあいだスコットランドにいつてきただけなのに……」

「そうよ。でも、あたしがロンドンをでてから、とつてもいろんなことがあつたでしょう？ ほら、エジンバラ祭で、『クルミ割り人形』の小さなクララをおどつたり、それから最後の晩にお城の遊歩道でタトー（軍楽隊の行進）を見たり……あのバグパイプ（スコットランドの民族楽器の笛）をふく人が、最後にたったひとり胸壁に立って、周囲のあかりがぜんぶ、きえたとき、あたし……」

ここでドリーナは、くちびるをかねで、「なきたいような気持ちだつた」ということばをおさえました。おばあさんは、こういうことばを、とてもきらっていたからです。

チェスター夫人は、ドリーナがまだ一歳半のときからそだててきましたが、夫人は孫娘がつりあいのとれた、かしこい少女になるように最善をつくしてきたのです。というのは、夫人ははげしい

感情とか情熱とかを、むしろおそれていたからでした。ずっと以前、ふつうの赤毛の娘だったベツツイー・チエスター——ドリーナのおかあさん——は、有名なダンサー、エリザベス・アイボリーになりました。そしてドリーナの唯一ののぞみは、自分もダンサーになることでした。ですから、イゴール・ドミニク・バレエ団といっしょにエジンバラへいくチャンスにあたえられたのは、ドリーナにとって、このうえもないすばらしいことだったのです。

タクシーがパーリアメント広場をまわると、まもなくチエスター夫妻とドリーナは、ミルバンク通りをはいったところにあるアパートのエレベーターにのっていました。チエスター氏が入り口のドアをあけると、ドアの内がわのマットの上に、手紙が山のようになっていました。おじいさんがざっとその手紙に目をおしているあいだに、夫人はひとへや、ひとへやのドアをあけて、なにもかわったことはなかったかとしらべてまわりました。

「ほとんど商用の手紙だ。ドリーナ、おまえのそこには、はがきが三枚と手紙が一通きてるよ。ジェニー・ピルグリムからだ。」

ウィラーバリの消印を見て、おじいさんはつけくわえました。

ジェニーはローズよりいっそうなかのいい親友だったので、ドリーナは目をかがやかせながら、その手紙をうけとりました。ふたりは一年にほんの数回しかあいませんでしたが、ふたりの友情はすこしもかわりませんでした。

「まあ、うれしいわ！ あの人、エジンバラへは、一回しか手紙くれなかったから。」

自分の小さいへやはいると、ドリーナは、ハンドバッグや手袋、ジャケットなどをベッドの上においてから、まぐらの上のほうにかかっているドガの複製画と、その反対がわのかべにかかっているユトリロの印刷画を、なつかしうにながめました。もうすぐドミニク・バレエ学校の秋の学期がはじまるうというときに、こうして家へ帰ってくるのは、なんとなくなったのしい気持ちでした。この日は九月の九日で、つぎの週の火曜日、十五日に学校がはじまります。

ドリーナは、テムズ川とランベス橋の見える窓べに立って、ジェニーの手紙をひらきました。二分のち、ドリーナのけたたましいさけび声でしたので、チェスター夫人はもうすこしで電気ボットをとりおとすところでした。

「いったいどうしたの？ けがでもしたの？」

と、夫人はさけびました。

ドリーナは居間の入り口にあらわれました。長い夏休みのあとで日やけたその顔が、びっくりするほど青くなり、まっ黒な目は大きく見ひらかれ、ジェニーの手紙をもった手が、かすかにふるえています。

「おばあちゃん、たいへんなのよ！」

チェスター夫人は返事をするまえに、ポットのプラグをさしこみ、スイッチをいれました。その

ときまでには、ドリーナのいつもの感情の爆発が、またはじまったのだとわかったからです。

「ドリーナ、しっかりおし。そして、おちついて話してみなさい。わたしはときどき考えるんだが、おまえがもうちょっと感情にふりまわされないようになるのは、いつの日だろうかってね。とにかく、おまえは、もう数週間で十五歳になるんだから……」

「でも、おばあちゃん、これはほんとにおそろしいことなのよ。ジェニーはまえからいつてたけど……あの人は、おとうさんやおかあさんがなにか心配してるらしいっていつてたのよ。そしてジェニーも心配してたことは、あたしも知ってたわ。だけど……」

「ピルグリム氏の商売になにかおこったのかね？」

と、チェスター氏がたずねました。しずかにへやへはいってきていたのです。

ドリーナはびっくりして、くるりとふりかえりました。

「おじいちゃんは、どうして知ってたの？ どうしてわかったのよ？」

「そういうことは、とかく世間に知れてしまうものなんだよ。」

チェスター氏は、ゆっくりといました。

「わしは、だいぶまえにそのうわさを耳にしたんだが、ほんとうでなければいいがと思っていたのだ。」

「あの会社は倒産したんですって。そしてすっかり整理したら、ピルグリムさんにはほとんどなん

にも財産ざいさんがのこらないんだそうよ。お仕事しごとさえなさそうだって。そしてジェニーは……」

「それはかなしいニュースだね。」

そういつて、おじいさんはとても心配しんぱいそうな顔をしました。

「それに、あんなにたくさん子どもがあつて、まだひとりも一本立いつぽんだちのものはいないんだから……」

「おきのどくな。ビルグリムのおくさん！」

チェスター夫人ふじんが同情どうじょうするようになりました。

「こういう場合ばあいには、いつでも主婦しゅふがいちばん苦勞くろうするもんですよ。」

「でも、かわいそうなジェニーは、いったいどうなるのよ？」

ドリーナはくらい目で、じつとふたりを見つめながら、

「ジェニーに農業のうぎようをやめさせるのは、ちやうど、あたしにダンスをやめさせるようなものだわ。」

じつをいうと、ドリーナは以前いぜん、ダンスをやめるようにいわれたことがあるのです。おじいさんとおばあさんが、ダンスはドリーナのためによくないと考えたからでしたが、そのときのことはいまだにがい思おもひ出でとして、ドリーナの心にのこっていたのでした。

「ジェニーはかしこい少女しょうじよですよ。」

おばあさんは、ドリーナのいつていることが、よくわからずにいいました。

「だから、あの子はどんな苦勞くろうもりっぱに背せおつていけると思おもうのよ。ジェニーはおかあさんに

とって、大きなたすけともなぐさめともなるでしょうね。」

「だけど、おばあちゃん、わからないの？ ダンスがあたしの命であるように、農業はジェニーの命なのよ。この世でジェニーにとって、ただ一つの目的は、農業をやるということなの。あの人はあと二年間、いまの学校にいてから、農業大学へいきたいと考えてたんだわ。」

「そして、ジェニーのそののぞみは、もうだめになったと、おまえは思うの？」

ドリーナは手紙をひらいて、ページをくりました。

「ジェニーはおわりのところに、ただ、こう書いてるの。」

『これらの事情で、わたしが農業へすすむという希望はうしなわれてしまおうでしょう。そのむごい現実に、わたしはまだ直面する勇氣がありません。でもおそかれ早かれ、直面しなければならいでしょう。ねえドリーナ、わたしはどうやってそれにたえたらいいのでしょうか？』

「ジェニーはその運命にたえるでしょう。あの子は、あんたよりしっかりした性格ですからね。それに、どっちにしても、女の子にとって農業がふさわしい職業だとは、わたしには思えませんねえ……」

「ジェニーにはふさわしいのよ。あの人はお百姓さんの生活について、なにもかも知ってるわ。ただ、ちゃんとした仕事につくためには、大学へいかなくちやならないのよ。ジェニーはおじさんの農場へいってくらふことさえないの。おじさんとおばさんは農場を売って、オーストラリア

へいくらしいから……」

それからドリーナはつけくわえました。

「おばあちゃん、あたしウィラーバリへいかなくちやならないわ。だって、ジェニーがこのむごい運命うんめいにひとりでたちむかっているのに、あたしが知らん顔してはいられないでしょう？ 早くいつて、あの人をばげましてあげなくちや！」

チエスター夫人みじんは紅茶こうちやをいれながら、まゆをしかめました。

「そんなとりこみのさいちゆうに、あんたがいつて、かえってじゃまじやないかしら？ めいわくになるんじゃないかと、わたしは思うんだがねえ……まあまあ、くよくよしなさんな。まずすわつて、あついお茶ちやを一ばいおのみ。気がしずまりますよ。」

ドリーナは、いわれたとおりに腰こしかけて、お茶ちやをのみ、ビスケツトをすこしたべましたが、その思ひは、もうウィラーバリの友のところへとんでおり、その決心けっしんはかたまっていました。

チエスター夫人みじんは孫娘まごぢやめの顔を見て、すぐそのことがわかったので、ため息いきをついて、

「この子は思ったとおりにするだらうね。」

と、つぶやきました。

ドリーナはまだからだ小さくて、ようすも子どもっぽいのですが、ちかごろの精神せいしん的な成長せいちようにはめざましいものがありました。ドリーナがいったんこうときめたら、説得せとくして、その決心けっしんをひる

がえさせようとするのは、おそらくむだなことでしょう。

チエスター氏も考えこんでいましたが、それはピルグリム一家の災難のせいではないことが、まもなくわかりました。おじいさんはこういいだしたからです。

「わしは手紙をもらった……それで、ちかいうちにニューヨークへいかなくちやならんだろう。

ニューヨークで会議があるんだが、わしはカーター氏がいくものと思つとつた。ところが、あの男は精密検査のために、病院へはいらなくちやならんという手紙をよこしたもんでね。」

「飛行機じゃないんでしょう？」

チエスター夫人はすばやくたずねました。

「ああ、船でいくよ。だが、そうなると来週出發せねばならん。わしは予防注射をうけなくちやならんし、もちろんビザのこともあるし、服や下着類もしらべてみなくてはならん……きゆうにいそがしくなるぞ。」

チエスター夫人は、また、ため息をつきました。せっかくたのしいお休みをすごしたあとで、また、わずらわしい生活にもどるのは、うんざりした気持ちだったのでしょう。

「だれかほかの人がいっちやいけなないんでしょうか？ あなたはあんまりじょうぶじゃないし、ニューヨークはとてもつかれるところですから……」

「わしがいかねばならんと思うね。それに、わしは以前よりずっとじょうぶになった。そのうえ、わ

しはもう一度^どニューヨークを見るのがたのしみなんだよ。わしはいつでも、あそこがすきだった。」
一瞬^{いつしゅん}ジェニーのための心配^{しんぱい}をわすれて、ドリーナはおじいさんを見つめました。

「まあ、おじいちゃんがニューヨークへいらしたことがあるなんて、あたし知らなかったわ。」

「ああ、なんべんもいったとも。だが、たいていはおまえが生まれるまえのことだった。わしは商用^{しょうよう}でいったんだが、それからベッツィーが……」

「おかあさんがニューヨークでおどったときという意味^{いみ}でしよう？」

「ベッツィーはたびたびニューヨークでおどったんで、友人^{ゆうじん}がたくさんあった。あの子がメトロポリタン・オペラ・ハウスでおどったとき、わたちは二回見にいったよ。そして、ベッツィーの知^ち人の家にとめてもらったりしたものだ。」

「おやおや！ あたしがそれを知らなかったなんて。」

そこでドリーナは、その伝説^{でんせつ}のような都^{みやこ}にいるおじいさんや、おばあさんを想像^{そうぞう}しようとした。

ニューヨーク！ ドリーナはジェノバやミラノを見て、すばらしいところだと思いましたが、
ニューヨークは……。

それからまもなく、ドリーナはおばあさんのゆるしをえて、電話^{でんわ}をかけにきました。

「もしおまえがいくとしても、ひと晩^{ばん}いじょうとまっちゃんいけませんよ。」

ダイヤルをまわしているドリーナに、チェスター夫人はきつぱりといいました。

「おまえはジェニーにあらうまではおちつかないだろうってことは、わかってます。だけど、こんどの訪問はごくみじかくきりあげることですね。あの人たちにとって、いまはとてもつらいときなんだから、お客はきてほしくないでしょう。わたしはそう思いますね……」

けれどもドリーナは、ピルグリム一家が自分をお客と考えるとは思いませんでした。それに、ドリーナがウィラーバリーにいくといったときのジェニーの「ああ、よかった！」という安心とよろこびのさけび声が、なによりの証拠でした。ジェニーはドリーナにきてほしかったのです。

「まあ、ドリーナ。わたし、どんなにあんたにあいたかったかしれないわ。そうだ、あすの朝の列車できてよ。あんたのおばあさまが、ひと晩だけしかとまっちゃいけないっておっしゃるのなら、わたしたちどうにもできないけど、あんたにあえるだけでも……」

「でも、あんたのおかあさまにはごめいわくじゃないかしら？」

「とんでもない。母はあんたにきてもらいたがつてるわ。あんたを家族のひとりのように思ってるから……」

「もちろん、あたしはお宅の家族みたいなものだわ。まあジェニー、こんどはとんだことだったわねえ。あたしなんていったらいいのか……」

電話のむこうでジェニーは、すすりなきをおさえているようでしたが、やがてしずかな声で、